

『源氏物語』における「人笑へ」--「名」「世語り」と「人笑へ」との関係を中心に

著者	北川 久美子
雑誌名	清心語文
号	3
ページ	1-11
発行年	2001-08
URL	http://id.nii.ac.jp/1560/00000345/

『源氏物語』における「人笑へ」

——「名」「世語り」と「人笑へ」との関係を中心に——

北川 久美子

一 はじめに

『源氏物語』には、対社会的意識を表す言葉の一つとして、「人笑へ」「人笑はれ」という語がある。『源氏物語』の使われ方からすると、「人笑へ」とは、「世間の物笑いになる」ことというぐらゐの意味である。「人笑はれ」も「人笑へ」とほぼ同じ意味を表す語であるので、本稿では、「人笑はれ」も「人笑へ」も一括して「人笑へ」と表現することとする。「人笑へ」になることを憚るということは、恥の意識に関連している。いわば、「名」を汚すことを恐れる意識である（注1）。『源氏物語』の登場人物たちは、「うき名」が立つこと、つまり、世間の評判になることを極端に恐れている。なぜ恐れるかという点、それは本人にとって大層不名誉なことだからであり、彼らが恐れる不名誉な評判とはとりもなおさず本人の恥辱となるからである。それ故、勢い、彼らは「人笑へ」になることを、なんとしても回避しようとするのである。以上述べたことから、『源氏物語』の「人笑へ」の用例の多く

は、その人物の行動を規制する傾向にあると言えるだろう。

ところで、登場人物たちが「人笑へ」を意識するのは、結婚問題に直面している時とか、自分の体面が傷つけられる時とか、自分の不名誉なことが露見する時などである。一例を挙げるならば、次のような場面である。

戚婦人の見けむ目のやうにはあらずとも、かならず人笑へなる事
はありぬべき身にこそあめれなど、世のうとましく過ぐしがたうお
ぼさるれば、背きなむことをおぼしとるに（「賢木」巻、七八頁）

藤壺には、源氏との密通が露見するのではないかということを恐れる危機意識が常にある。右に先行する部分にも「かかること絶えずは、いとどしき世に、うき名さへ漏りいでなむ」（「賢木」巻、七八頁）とあり、「うき名」つまり、悪い評判が立つことを極度に恐れているのである。そして、不幸にも露見した場合、「人笑へ」になることを回避するために出家を決意する。このように、人生の転機や危機に直面して、人物たちが、身をどう処していくかを決定しようとする時に、「人笑へ」を意識する例が多い。言うならば、「人笑へ」の意識とは他人が自

分をどう見ているかということを強く意識するものであろう。

そこで、本稿では、「人笑へ」の類義語とは言えないが、しばしば響き合って存在する「名」「世語り」との関係について検証したい。そして、そのことを通して、さらに、「人笑へ」の意識について深く追究していきたい。

二 「名」と「人笑へ」

「名」とは、『源氏物語』の使われ方からすると、「噂、評判」というぐらいの意味である。「名」の付く語は、一二六例（「名」九九例、「御名」二〇例、「あざな」一例、「あだな」二例、「なきな」二例、「のちのあとの名」一例、「もののな」一例）数えられ、その用例の多さからも、登場人物達が「うき名」が立つことを極度に恐れていることがわかるだろう。そして、その多くの用例の中から、「名」と「人笑へ」との関係を考察するにあたり、本稿では、女性では六条御息所と臘月夜と落葉宮に、また、男性では主人公である源氏に焦点を当てていくこととする。まず、六条御息所の場合を見てみよう。車争いの後、もの思いが深まる六条御息所の伊勢下向の決意はぐらつく。

いまはとてふり離れ下りたまひなむは、いと心ほそかりぬべく、世の人聞きも人わらへにならんこととおぼす。さりとて立ちとまらべくおぼしなるには、かくこよなきさまにみな思ひくたすべかめるも安からず、（『葵』巻、一七頁）

御息所は源氏が薄情な仕打ちをするので、そのために伊勢下向したと噂されるのも「人笑へ」であり、その「人笑へ」を避けて都に止まるのも、一層の「人笑へ」であると苦悩するのである。

一方、御息所をそのような「人笑へ」な状況に追い込んだ源氏は、再三、御息所の「御名」（『葵』巻、九頁、三三頁）を汚すことを憚りながらも、正式な結婚の形をとらない。そればかりか、御息所の物怪に直面してからは、一層、御息所を避けるようになる。御息所は、「かく心より外に、若々しきもの思ひをして、つひにうき名をさへ流しはてすべきこと」（『葵』巻、三四頁）と「うき名」を流すことを恐れるのである。「うき名を流す」とは、悪い評判を世に広く後の世にまで伝えることである。

このように見えてくると、「うき名」が立つことは、噂になった当事者である女性にとっては「人笑へ」であり、「人笑へ」な女性を返り見ない男性は、その女性の名誉を著しく傷つけていることになるだろう。また、その「名」は、六条御息所ほどの高貴な女性であれば、なおさら、「あるまじき名」（『若菜下』巻、一五〇頁）を流したとして、後々まで、源氏の負い目となるのである。次は、その点について源氏が紫上に葵上や六条御息所や明石君について語る中で、六条御息所のことを述懐している場面である。

中宮の御母御息所なむ、さまことに心深くなまめかしき例にはまづ思ひ出でらるれど、人見えにくく、苦しかりしさまになむありし。恨むべきふしぞ、げにことわりとおぼゆるふしを、やがて長く思ひつめて深く怨ぜられしこそ、いと苦しかりしか。心ゆるび

なく恥づかしくて、我も人もうちたゆみ、朝夕の睦みをかはさむには、いとつつましきところのありしかば、うちとけては見おとさるることやなど、あまりつくろひしほどに、やがて隔たりし仲ぞかし。いとあるまじき名を立ちて、身のあはあはしくなりぬる嘆きを、いみじく思ひしめたまへりしがいとほしく、げに、人柄を思ひしも、我罪ある心地してやみにし慰めに、中宮を、かく、さるべき御契りとはいひながら、とりたてて、世の譏り、人の恨みをも知らず心寄せたてまつるを、かの世ながらも見なほされぬらん。今も昔も、なほざりなる心のすざびに、いとほしく悔しきことも多くなむ〔「若葉下」〕卷、一四九・一五〇頁

右のように源氏が語る通り、事実六条御息所は源氏との「うき名」を世間の人々に取り沙汰され、追いつめられていった女性であった。以上のような意味でも、「名」「御名」と「人笑へ」は、響き合せて存在すると言えるであろう。

次に臘月夜の場合を考えてみたい。源氏と臘月夜の密通露見により、源氏は、須磨、明石に流離することとなる。その時、臘月夜は、「尚侍の君は、人わらへにいみじうおほしくづほるを」〔「須磨」卷、一三七頁〕とあるように、世間の嘲笑の的であった。源氏が復活した後、その臘月夜を以前と変わらず寵愛する朱雀帝の言葉に、臘月夜は、源氏との過去を反省する。

などてわが心の若くいはけなきにまかせて、さる騒ぎをさへひき出でて、わが名をばさらにもいはず、人の御ためさへなどおぼし

出づるに、いとうき御身なり、〔落標〕卷、一九七頁

源氏との醜聞という「人笑へ」な状況により自分の名誉を著しく傷つけられただけでなく、源氏までも傷つけることになったと深く反省している。臘月夜の場合も、「人笑へ」な状況はそのまま、「名」を汚すことにつながっていると言えるだろう。

六条御息所や臘月夜と同様に「人笑へ」な状況にあり、さらに、「うき名」まで立ち、苦悩する女性に、落葉宮がいる。

落葉宮は、柏木の死により、皇女が臣下に降嫁し、さらに、若くして未亡人になり後見を失ったことで、母一条御息所や朱雀帝から、「人笑へ」になったと、思い嘆かれる。そのうえ、自らも夕霧の懸想により、さらに、「うき名」が立つことを嘆くのである。母御息所は、皇女としての格式を保てるようにと願うが、「世づかはしう軽々しき名」〔夕霧〕卷、三〇四頁が立つことを嘆くのである。また、落葉宮も、夕霧の言葉に従っていたら、「いかなる名をくたさまし」〔夕霧〕卷、三〇五頁と恐れている。夕霧との「うき名」が立てば、落葉宮は、より一層、「人笑へ」な状況に追い込まれるのである。ここでも、「名」と「人笑へ」は響き合せて存在していると言えるだろう。

最後に、源氏の場合を考えてみたい。

「世の人の聞伝へん後のそしりもやすからざるべきを憚りて、まことの神の助けにもあらむを背くものならば、またこれよりまさりて、人笑はれる目を見む。（略）退きて咎なしとこそ、昔のさかしき人も言ひおきけれ、今日かく命をきはめ、世にまたなき目

の限りを見尽くしつ。さらに後のあとの名をばぶくとて、たけき事もあらじ。」〔明石〕巻、一六三頁)

右の心内語は、源氏が明石入道の迎えに従ったという世間の非難を氣遣つて、神意に背くならば、それ以上に世間の物笑いになると判断し、悩む場面である。「人笑はれ」のあとに、「後のあとの名」という体面に関わる語が続き、このままの状態が続くと「人笑へ」になり、それは、大変不名誉なことであるということが関係づけられている。このように、源氏は「人笑へ」を意識する時に自分の名を汚すことを思ひやっているのである。

『重家集』^{〔注2〕}に、「人笑へ」を詠み込んだ歌がある。

忍恋

こひすてふなをばたてじとおもふかな人わらはれになりぬべければ

〔重家集〕一五九、藤原重家

右は、「拾遺和歌集」^{〔注3〕}の壬生忠見の歌を本歌とする歌であるが、「名が立つ」ことと、「人笑へ」との関係をよく言い当てていると思われる。

「うき名」が立つことは、すなわち、「人笑へ」になることなのである。

『源氏物語』の登場人物たちが、「人笑へ」を恐れるのは、その先に「うき名」が立つ、「名をくたす」ことを極度に恐れているからであらう。

三 「世語り」と「人笑へ」

「世語り」とは、『源氏物語』の使われ方からすると、「世間の語り

草」「世間話」「世間の取り沙汰」と言うぐらゐの意味である。次は

『清巖茶話』^{〔注4〕}の一節である。

藤壺の返しに、

世がたりに人や傳へんたぐひなくうき身を覚ぬ夢になしてもとあり。藤壺は源氏の為には継母なり。さるによりてかゝること有りしかば、たとひうき身は夢にてはたりとも、うき名は止りて後の世がたりにいひ傳ふべしと也。〔清巖茶話〕、「落花」

右の藤壺の「世語りに」の歌は、源氏の「見てもまたあふ夜まれなる夢のうちにやがてまぎるわが身とものがな」〔若紫〕巻、一六四頁)の歌に対する返歌である。この源氏と藤壺の贈答歌は、『源氏物語』の和歌の中でも後の作品に大きな影響を与えている。それは、藤原定家の『物語二百番歌合』^{〔注5〕}に二首とも選ばれていることでも明らかである。また、右にあるように、正徹は幽玄について述べるために、この「世語りに」の歌を引いているのである。そこで、話題を「世語り」に戻すと、福田秀一^{〔注6〕}は、この場合の「世語り」を「ゴシップ」と口語訳している。「ゴシップ」とは「噂話」というぐらゐの意味であり、その噂話は必ず「言ひ伝へ」られるのである。しかも、それは「憂き名」であり、そのような悪い評判は後世に残ると言っているのである。また、「常夏」巻の冒頭、東の釣殿で涼んでいる源氏が親しい者たちに対して次のように語っている。

このごろ世にあらむ事の、すこしめづらしく、ねぶたさ醒めぬべからむ、語りて聞かせたまへ〔常夏〕巻、一五六頁)

右にあるように、「世間話」と言っても、現代社会で日常的に交わされている世間話ではなく、何か珍しい、眠気の覚めるような話を指していると思われる。

いずれにせよ、「悪い噂」や「何か珍しい眠気の覚めるような話」であれば、それを聞く世間の人々にとっては、この上なく興味深いものであるに違いないだろう。一方、「世語り」に晒されている側にとつては、この上もない恥辱であり、それ故「世語り」になることを極端に恐れるであろう。その点について、小峯和明^{注7}は、「世語り」とは「今現在の特定の人物をめぐる話題性が核となり、伝播の範囲はあまりひろくないようだ。」と述べている。さらに、「世語り」に囲まれてこそ「物語の中心人物たりえる」とも述べている。以上、「世語り」とは何かということについて検証した結果、「世語り」も「人笑へ」と同様に『源氏物語』の鍵語であると言えよう。さらに言うならば、この場合の「世」とは、上流の貴族社会を指しており、「人笑へ」「人聞き」の人とはほぼ同様な内容を表していると思われる。「世語り」は伝えていくものだから、「人笑へ」な状態が、世間の噂にのぼり、さらに、悪い意味での「世語り」になっていくのであろう。そういう意味では、「世語り」になることは、貴族社会に生きる人々にとって「人笑へ」以上に致命的なダメージであったらう。

四 「玉鬘十帖」の「世語り」と「人笑へ」

『源氏物語』には、付録にあげたように、七例の「世語り」がある。七例というのは、決して多い用例数ではないのだが、先行文学の中には、管見に入る限り、確定した用例はない^{注8}ことから、石井正巳^{注9}は、『源氏物語』が、「世語り」を方法として取り込んだ先駆的な作品だ」としている。「人笑へ」も、先行文学の用例が極端に少なく、『源氏物語』に圧倒的な多さを誇っていることから、重要な鍵語だ^{注10}と指摘する向きもあるが、「世語り」と同様、「人笑へ」も、『源氏物語』が方法として取り込んでいると言っても過言ではないだろう。

『源氏物語』の七例の用例を、概観してみると、付録⑥の「うちとけ世語り」（内緒話というくらいの意味）以外の六例は、「めづらしき世語り」の用例である。そのうち、四例②、③、④、⑤は、玉鬘十帖の中で取り沙汰される「世語り」である。ここでは、玉鬘十帖の「世語り」を中心に、「人笑へ」との関係を考えていきたい。

① わがみづからのうさぞかし。親などに知られたてまつり、世の人めきたるさまにて、かやうなる御心ばへなましかは、などかはいと似げなくもあらまし。人に似ぬありさまこそ、つひに世語にやならむ（「蜚」巻、一四一頁）（付録の②）

② 「さてかかる古事の中に、まろがやうに実法なる痴者の物語はありや。いみじくけ遠き、ものの姫君も、御心のやうにつれなく、そらおぼめきたるは世にあらじな。いざ、たぐひなき物語にして、世に伝へさせん」とさし寄りて聞えたまへば、顔をひき入れて、「さらずとも、かくめづらかなる事は、世語にこそはなりはべ

りぬべかめれ」(「蜚」卷、一四八・九頁)(付録の③)

右の①、②の用例は、玉鬘が懸念する「世語り」である。①「人に似ぬありさま」とは、具体的には、実の父にも知られないまま養父である源氏に懸想されるということが、世間一般には珍しいことだということである。「細流抄」^{〔注1〕}にも、「人に似ぬありさま」について次のようにある。

今玉かづらの有さまはたぐひもなきよし也。源の実子のやうに聞えありて、さるむつかしき方の事出で来ぬれば、人聞きもいかがと思ひ給ふ也。

②「かくめづらかなる事」もほぼ同様の内容を表している。『湖月抄』^{〔注12〕}にも、「実法なる痴者」とは「玉かづらをわが物とせぬ事をのたまふなるべし」とある。さらに、源氏と夕顔の関係を考えると、「母と子を犯せる罪にあたるタブー」^{〔注13〕}を惧れているとも考えられるだろう。この場面に先立つ「胡蝶」卷末で、玉鬘は、源氏との「うき名」が世間に漏れた時の「人笑へ」を思い苦悩している。

③かうやうの気色の漏れ出でば、いみじう人笑はれに、うき名にもあるべきかな、(「胡蝶」卷、一三三頁)

「かうやうの気色」とは、親がその娘に懸想しているような事情をさしている。玉鬘は、源氏の懸想をかわしつつ、適度の距離を保つために苦心する。そこには、常にその恥ずべき事実が世に漏れ噂になったらという「人笑へ」へのおびえがある。そして、口から口へと噂が広まり、その結果、「世語り」になることを極度に恐れているのである。「人笑へ」になることでさえ、貴族社会では致命的なことだが、放つて

おけば、ついには、「世語り」になって後の世まで言い伝えられることになり、狭い貴族社会では生きていくことができないような最悪の事態になってしまうのであろう。その意味では、「世語り」の方が「人笑へ」よりも残酷だといえるだろう。

また、②で玉鬘が、「世語にこそはなりはべりぬ」と言うのは、源氏が、自分と玉鬘のことを「たぐひなき物語にして、世に伝へさせん」と言った言葉に対してのものである。ここで言う物語になって、後世まで伝わることは、石井正巳^{〔注9〕}も指摘しているように、「世語り」となって語り草になったとしても、いつかは忘れられる世間話よりも、玉鬘にとってはより屈辱的であったのかもしれないだろう。

④ことごとしく、さまで言ひなすべき事にもはべらざりけるを、この春のころほひ、夢語したまひけるを、ほの聞き伝へはべりける女の、我なむかこつべきことあると名のり出ではべりけるを、中将の朝臣なむ聞きつけて、まことにさやうに触ればひぬべき証やあると尋ねとぶらひはべるける。くわしきさまはえ知りはべらず、げにこのころめづらしき世語になむ人々もしはべるなる。

(「常夏」卷、一五七頁)(付録の④)

⑤かう忍びたまふ御仲らひの事なれど、おのづから人のをかきことに語り伝へつつ、次々に聞き漏らしつつ、あり難き世語にぞささめける。内裏にも聞しめしてけり。(「真木柱」卷、二四七頁)(付録の⑤)

④、⑤の用例は、直接、「人笑へ」という語を導くものではないが、

「人笑へ」との関連を考えてみたい箇所ではある。

④は、近江君登場の場面であるが、三田村雅子^{〔注14〕}は、「世語り」の被害者」として近江君を取り上げ、もの笑いの種になったことが、一家の恥となり、ひいては「世語り」となり、源氏の知るところとなったと述べている。近江君の「人笑へ」な状態が「世語り」になったとの考察だがどうも肯けない。その点について「民江入楚」^{〔注15〕}にも、「近江君のをかしきさまをいふ也」と同様の指摘があるのだが肯けない。源氏が、「大臣の外腹のむすめ尋ね出でてかしづきたまふ」という噂を聞いたのは、近江君のバーソナティが何もわかっていない時点である。後に、その実態が明かになっていくに従って、近江君は「人笑へ」となり、さらに、内大臣が、「人笑へ」となっていくのである。

いったい、④の場面で、「世語り」となっている事柄は何だろうか。「人のため、おのづから家損なるわざ」(「常夏」巻、一五七頁)とはどういうことを考えなくてはならない。ここでいう「人」とは、おそらく内大臣を指しているであろう。内大臣は、娘雲居雁を入内させられなくなったことを、「飽かず口惜し」(「常夏」巻、一六六頁)と思っている。冷泉帝の後争いでは、弘徽殿女御が、秋好中宮に敗れている。内大臣は、さらなる后がねの娘を捜し求めているのである。外腹の娘まで捜し出してかしづくことは、当時の社会にあつては、珍しい「世語り」であつたのかもしれない。源氏もそのことを「いと多かめる列に離れたらむ後る雁をしひて尋ねたまふがふくつけきぞ」(「常夏」巻、一五七頁)と述べている。源氏に對抗意識を燃やすが故に、よく調べ

もせずに外腹の娘まで捜し出そうとする内大臣の姿こそ、「家損なるわざ」であつたにちがいない。また、「細流抄」^{〔注11〕}にも「家損なる」とは、「落胤腹などのあるは人の家損なると也」とある。このことから、「世語り」に晒されているのは、近江君ではないと言えるだろう。

⑤についても、三田村雅子^{〔注14〕}は、鬚黒との予想外の結婚という衝撃的な事実こそが「世語り」になっているとしているが、そのことも肯けない。蛭兵部卿宮との結婚をすすめながらも自ら玉鬘に懸想していた源氏にとつては、紫上の異母姉である北方がいる鬚黒との結婚は、意外な結末であつただろう。しかし内大臣に心を寄せる鬚黒は、「実の親の御心だに違はずは」(「藤袴」巻、二四二頁)として、強引に結婚してしまふ。実の親である内大臣は、「なかなかめやすかめり」(「真木柱」巻、二四七頁)と安堵している。それらの点からも、鬚黒との結婚が、それほど不自然なこととも思えない。武骨で妻子がある鬚黒との結婚という事実が「世語り」になるというよりも、尚侍として出仕させようとしていたことは、世に漏れていた事実で、源氏は結婚のことを、「内裏に聞しめさむこともかしこし」(「真木柱」巻、二四六頁)と公の出仕が危ぶまれることを恐れ、二人のことを内密にしたのであろう。『細流抄』^{〔注11〕}にも、「かふ忍び給ふ」とは「まへに、内にきこしめさん事など忍び給ふこと也」とある。このことから、源氏は帝に知れることを恐れていると言えよう。公に尚侍として出仕することが予定されていた玉鬘の突然の結婚こそは、「あり難き世語り」になるはずであり、そのことは、当然、「内裏にも聞しめしてけり」(「真木柱」巻、二四七頁)とあるよう

に帝の知るところとなるのである。鬚黒による略奪結婚は、公の役割として（注16）の尚侍として出仕することを妨げることであり、人々は「あり難き世語」として「ささめく」のである。

④と⑤の用例は、どちらも珍しい世間話の例で、先の玉鬘が源氏の懸想によって「人笑へ」になることを恐れ、その先に「世語り」を恐れるというように、「人笑へ」と「世語り」が、一つながりになっていた用例とは、区別しておかなくてはなるまい。ただ、④の用例に関しては、「めづらしき世語」として、世間の人々が笑っているのは、「舌疾」な近江君のことではなく、外腹の娘を捜し出す内大臣の「ふくつけ」さであろう。「人笑へ」なのは、内大臣なのである。

以上、「めづらしき世語り」の用例について検証しながら、「人笑へ」との関係を考察した。その結果、「人笑へ」と「世語り」との間には密接な関係があることがわかった。特に、「世語り」に晒される玉鬘の用例で明かなように、養父源氏に懸想され、「人笑へ」を恐れる玉鬘が「人笑へ」になることよりも恐れていたものは、噂が広まり、やがては「世語り」になってしまうことであつたろう。このように「世語り」は「人笑へ」の延長線上にあつて、当時の貴族社会では、最も恥すべきことではなかったか。また、「人笑へ」な状況は当然、噂になり広まっていくであろうから、「世語り」になってしまった事柄とは、周囲から笑われている事柄であろう。「めづらしき世語」として人々が、語っている事柄は、「人笑へ」な状況なのである。

五 おわりに

登場人物たちが、「人笑へ」な状態になることを忌避しようとするのは、世間から嘲笑され、名折れとなることを、存在が根底から揺るがされるほどの屈辱だと考えているからである。それだけ登場人物たちは、自分の名誉や世評を気にしているという証拠であろう。「名」は『源氏物語』には、一二六例もの用例を数えることから、登場人物たちが「憂き名」が立つこと、「憂き名」を流すことを極度に恐れていると言えるだろう。一方、「世語り」とは「噂話」であり、そして、それは必ず言い伝えられるのである。つまり、「憂き名を流すこと」とそれはほぼ同義であると言えるだろう。「世語り」は『源氏物語』中わずかに七例と用例数は少ないが、玉鬘十帖に集中して現れ、「人笑へ」の語と密接な関係が認められた。

以上、考察してみた結果、「人笑へ」と「名」「世語り」とは切り離しては考えられない。「うき名」が立つことは、女性にとつては、「人笑へ」なことであり、「名」を汚すことである。さらに、「人笑へ」な状態が、世間の噂に上ると、悪い意味での「世語り」になっていくのである。このように、「名」「世語り」は、「人笑へ」の意識の延長線上にあつて、狭い貴族社会においては、最も恥すべきこととして、登場人物たちは、「人笑へ」になること、さらに、「名」を汚すこと、「世語り」になることを極度に恐れるのである。

『源氏物語』の本文の引用は、阿部秋生著校注古典叢書『源氏物語』全六卷（平成十年二月、明治書院）に拠った。

注1 日向一雅「源氏物語の『恥』をめぐる」（『日本文学』一九七七年九月）

2 『新編国歌大観第三卷、私家集編1』（昭和六十年五月、角川書店）

3 『新編国歌大観第一卷、勅撰集編』（昭和五十八年二月、角川書店）

天曆御時歌合 壬生忠見

こひすてふわが名はまだき立ちにけり人しれずこそ思ひそめしか
（『拾遺和歌集』卷十一、恋一、六二二）

4 正徹『清巖茶話』（『日本歌学大系第五卷』昭和三十二年七月、風間書房）

5 『新編国歌大観第五卷』（昭和六十三年四月、角川書店）

6 福田秀一・島津忠夫・伊藤正義編集『正徹物語』（鑑賞日本古典文学第二十四卷中世評論集）昭和五十一年六月、角川書店）

7 小峯和明「世語り」（『国文学』物語会議―語りと物語り事典、平成二年二月）

8 『和泉式部日記』の「はかなき夢をだに見て明かしてはなにかのちの夜がたりにせん」（古典大系本・古典全集本）「夜がたり」と

「世がたり」とをかける（古典全集本）「世がたり」（古典集成本）

『宇津保物語』（国譲下）二七〇頁「四人ノ翁」（古典大系本）

「よかたりのをきな」という本もある。

9 石井正巳「世間話・世語り―『源氏物語』の世界―」（『説話の講座第二卷』説話の言説―口承・書承・媒体―、平成三年九月、勉誠社）

10 原岡文子「浮舟物語と『人笑へ』」（『国文学』一九九三年十月）

11 『内閣本細流抄』（『源氏物語古注集成7』昭和五十五年十一月、桜楓社）

12 『増注源氏物語湖月抄』上・中・下（昭和二年九月―三年十月、弘文社）

13 藤井貞和「タブーと結婚」（『源氏物語の始原と現在』昭和五十五年五月、冬樹社）

14 三田村雅子「源氏物語の世語り―『他者』の言葉、『他者』の空間―」（『源氏物語講座六』平成四年八月、勉誠社）

15 『岷江入楚第三卷』（『源氏物語古注集成13』昭和五十七年二月、桜楓社）

16 後藤祥子「尚侍攷―臘月夜と玉鬘―」（『日本女子大学国語国文学論究』昭和四十二年六月）に「政治の要人としてのかけがえない役割を付与されていたもの」「最高の地位と権威」というような記述がある。

（きたがわ くみこ／大学院特別研究員）

付録

世語りの用例

①「若紫」巻、一六四頁一四行

何ごとをかは聞えつくしたまはむ。くらぶの山に宿もとらまはしげなれど、あやにくなる短夜にて、あさましうなかなかなり。

見てもまたあふ夜まれなる夢のうちにやがてまざるわが身と
もがな

とむせかへりたまふさまも、さすがにいみじければ、

世がたり人にやつたへんたぐひなくうき身をさめぬ夢になしても
思し乱れたるさまも、いとことわりにかたじけなし。

②「蛩」巻、一四一頁六行

姫君は、かくさすがなる御気色を、「わがみづからのうさぞかし。

親などに知られたてまつり、世の人めきたるさまにて、かやうなる

御心ばへなましとかば、などかはいと似げなくもあらまし。人に似ぬ
ありさまこそ、つひに世語にやならむ」と起き臥し思しなやむ。

③「蛩」巻、一四九頁四行

「さてかかる古事の中に、まろがやうに実法なる痴者の物語はありや。
いみじくけ遠き、ものの姫君も、御心のやうにつれなく、そらおほめ
きたるは世にあらじな。いざ、たぐひなき物語にして、世に伝えせん」と
さし寄りて聞えたまへば、顔をひき入れて、「さらずとも、かくめづらかな
る事は、世語にこそはなりはべりぬ

べかめれ」とのたまへば

④「常夏」巻、一五七頁七行

「ことごとしく、さまで言ひなすべき事にもはべらざりけるを、この
春のころほひ、夢語したまひけるを、ほの聞き伝へはべりける
女の、我なむかこつべきことあると名のり出ではべりけるを、中将
の朝臣なむ聞きつけて、まことにさやうに触ればひぬべき証やある
と尋ねとぶらひはべるける。くわしきさまはえ知りはず。げに
このころめづらしき世語になむ人々もしはべるなる。かやうのこと
こそ、人のため、おのづから家損なるわざにはべりけれ」と聞ゆ。

⑤「真木柱」巻、二四七頁一二行

かう忍びたまふ御仲らひの事なれど、おのづから人のをかききこ
とに語り伝へつつ、次々に聞き漏らしつつ、あり難き世語にぞさ
さめきける。

⑥「手習」巻、二六〇頁四行

「僧都の語りしに、いとももの恐ろしかりし夜のことにて、耳もどど
めざりしことこそ。宮はいかでか聞きたまはむ。聞えん方なかり
ける御心のほどかなと聞けばまして聞きつけたまはんこそ、いと
苦しかるべけれ。かかる筋につけて、いと軽くうきもののにのみ
世に知られたまひぬめれば、心憂くなむ」とのたまはす。いと重
き御心なれば、必ずしも、うちとけ世語にても人の忍びて啓しけ
んことを漏らさせたまはじなど思す。

⑦「夢浮橋」巻、二六五頁八行

「(略) やうやう生き出でて人となりたまへりけれど、なほこの領じたりける物の身に離れぬ心地なんする、このあしき物の妨げをのがれて、後の世を思はんなど、悲しげにのたまふことどものはべしかば、法師にては、勧めも申しつべきことにこそはとて、まことに出家せしめたてまつりてしはべり。さらに、しろしめすべきこととはいかでかそらにさとりはべらむ。めづらしき事のさまにもあるを、世語にもしはべりぬべかりしかど、聞えありて、わづらはしかるべきこともこそと、(略)」